ぼくたちのＬＩＦＥ

敦賀市立赤崎小学校

五年

山本（やまもと）　和加子（わかこ）

←

各務原市立鵜沼第三小学校

六年

木村（きむら）　恵（めぐみ）

高沼（たかぬま）　朋香（ともか）

山口（やまぐち）　真由華（まゆか）

長尾（ながお）　美侑（みう）

小酒井（こざかい）　玲奈（れいな）

葛谷（くずや）　優衣（ゆい）

ぼくは、学校の帰り道を一人でよたよたと歩いていた。家に入って、くつをぬぎすて寝ころんだ。ぼくは、とても疲れていた。学校で、クラスメイトのけんにボコボコにされ、その上、忘れ物をして先生におこられたからだ。はっきり言うと、ぼくは学校がきらいだ。毎日が楽しくない。おもしろくない。一人で旅に出たい気持ちだ。

そんなぼくにも、親友がいる。クラスメイトのゆうきだ。とてもやさしい。気が合う。でも一つだけ、ゆうきとぼくとが困っていることがある。それは、いろいろなことが似ていることだ。テストの点数もいつも同じ。運動が得意なのも同じ。犬を飼っていることも、ネコがきらいなことも同じ。まだまだ似ていることはたくさんある。

そんなゆうきは、ぼくのライバルでもある。体育の時間、体力テストのシャトルランでゆうきに負けたことはとてもくやしかった。ぼくは、ゆうきに少し

でも差をつけたかった。でも、どうやって差をつけたらいいのか。そう、がんばればいいんだ。でも、どうやってがんばればいいのか。いくら考えてもわからなかった。

次の日、学校へ行くとゆうきがいた。ゆうきは、きびしい口調で言った。
「今日は全校朝会があります。着がえないでください。全校朝会が終わったら、早く着がえてくださいよ」

ぼくは、とてもむかついた。どうやってもゆうきと差をつけなければ……。燃えてきた。

全校朝会では、いつも児童会長が今後のことについて話す。それを聞いていたぼくは、ふと思いついた。
「そうだ、児童会長だ」

何かがスーッと体の中から出ていって、すっきりしたような気がする。もし、ぼくが児童会長になったとしたら、ゆうきはもちろん他のみんなにもいろいろ

指示ができるのだ。どうやって差をつけたらいいのか、どうやってがんばればいいのかがわかってとてもいい気分だった。児童会長になるには、人前で大きな声ではっきりと話せること、みんなのことを思って活動することの二つが必要だ。それができればだれでもがなれる。ぼくはそう思っていた。でも、それはまちがいだった。

二週間後、児童会長になりたい人を聞く時がやってくる。一ヶ月後には選挙もある。とてもドキドキする。楽しみだ。でもぼくは、その日、思いもよらないことが起きることを知らなかった。

二週間後、児童会長になりたい人を聞く時がきた。ぼくは、わくわくした。先生が、なりたいかどうかを一人ずつに聞いていく。ついに、ぼくの番が来た。

ぼくは、意気込んで

「児童会長を、ぜひやってみたいです」

と言った。今のところ、なりたいのはぼくだけのようだった。先生は次々に聞

いてゆき、ゆうきの番が来た。ゆうきも、
「児童会長になりたいです」
と言った。ぼくは、息を飲みこんだ。そのパターンがあったのを忘れていた。
ぼくだけじゃない。ゆうきもなりたかったんだ。★
そして、ついに選挙の日が来た。ぼくは、どうしてもゆうきに勝ちたくて、勝ちたくてずっとこの日を待っていた。クラスで投票することになった。でも、仲がいいゆうきと戦うのはちょっとなぁ～。
クラス全員二十九人。(ぼくの方に十五票以上は入って）と、願っていた。
ぼくは目をつぶった。ゆうきがライバルかぁ、やっぱりなんか変な感じがする。先生が言った。
「二人の中から一人選んで手を挙げて下さい」
選挙直前、ぼくはとてもドキドキした。先生がまた言った。
「決まりましたか？　ゆうきさんから聞きます。ゆうきさんがいいと思う人」

次は、ぼくの番だ。と、思ったが……。
「みなさん生徒会長はゆうきさんに決まりました」
その後、ぼくは、ゆうきが何票だったのか先生に聞いた。先生は言った。
「ゆうきくんが十五票、君は十四票だったよ、残念だったね」
とてもくやしかった。
次の日学校で……
「ゆうき！　おめでとう！」
「ともやも、すごくおしかったよ。ぼくも一人じゃ不安だから、ともやも一緒にぼくを支えてくれない？」
「うん。ぼく、支えるよ！」
ぼくたちの学校では、もうすぐ運動会がある。それに向けてぼくたちは、何度も話し合った。
「児童会種目って何にする？」

「つなひき!!」
「つなひき!!」
「同時に言ったね！　クスクス」
「他に何かある？」
「う～ん」
「玉入れはどう？」
「玉入れはどう？」
「またまた息ぴったりだね」
「ねぇ、ぼくたちってすごく似てない？」
「うん。ぼくもそう思っていたんだ！」

こうして話し合いが終わって、二人とも家に帰った。
ぼくは家に帰って、お父さんに話した。

「お父さん！　選挙でゆうきに負けちゃったけど、最近すごく仲良くなったんだ！」

「え？　ゆうきだって？」

「うん。あの、いろんな所がぼくと似ていて……」

お父さんは、びっくりした。

「あのな、ともやに話があるんだ……」

ぼくはドキドキした。今から何を話されるのだろう？

「実は、ともやとゆうきは双子なんだ。ずっとだまっててごめん……」

ぼくはおどろいた。

「え？　どうして？　なんで？」

もう頭がおかしくなりそうだった。

「お父さんからお願いがあるんだ。ゆうきに双子だってことを伝えてくれないか？」

と言い、ぼくに写真をくれた。ゆうきも写っている。
ぼくは、思い切って、ゆうきに話すことにした。
～学校～
「――なあ、ゆうき」
「何？」
「ちょっと、大事な話があるんだけど……驚かないで聞いてね。実は……ぼくとゆうきは双子なんだ!!」
「え!?　いきなり何言ってんの？　そんなわけないだろ!?」
「ほんとだよ！　ゆうきの家は、母子家庭だよね？　ぼくの家は父子家庭。ほら、考えてみて。ぼくら、たくさんの事が似てるでしょ？　ずっと分からなかったけど……ほら、この写真みて！　ぼくのお父さんからもらったんだ。ほら、この右に写っているのがぼく。こっちの左に写ってるのがゆうき。後ろには…ぼくらのお父さんとお母さんでしょ？　本当は双子だったからなんだ！」

「……本当に、おれとともやは、双子なの？　たしかに、顔も考え方も似てるなと思ってたけど……」
「まだぼくも信じられないけど、そうとしか考えられないよね。ぼくとゆうきの親たちは、昔、結婚してたんだね！」
二人はいっしょに笑い合った。
「それなら、みんなまたいっしょに会わない？」
「それなら、みんなまたいっしょに会わない？」
「さすが双子。息ピッタリだね」
「うん！　じゃあ、今日帰ったらおたがいの親に話をしようよ！」
「そうしよう！」
ゆうきはお母さんに、ぼくはお父さんに、みんなで一緒に会わないかと聞いた。そしたらどちらも会うことを許してくれ、四人で会うことになった。
市民公園ふん水前には、十時半に集まることになっているけど、ぼくとお父

さんはゆうきたちより早く着いた。お母さんに会える。ぼくはドキドキが止まらなかった。
そこへ、ゆうきたちが来た。へぇー、あの人がお母さんなんだ。けっこう美人だ。
「あなたがともや？　大きくなったわねぇ。ゆうきとそっくりだわ。やっぱり双子ね」
なんだかぼくはうれしくなった。お母さんのぬくもりがその一言に感じられた。
それからぼくらは日が暮れるまでいっぱい話した。
いっしょに暮らしたい……。
ぼくはそう思った。楽しい毎日がきっと送れるにちがいない。笑顔いっぱいの家がいいな。